

「認知症世界の歩き方実戦編」：笥 祐介（かけい ゆうすけ） 「顔というシンボル無しに、人はどうつながるのか」【実戦編 顔無し族の村】

－PART I 対話編：認知症の方が生きる世界を知り、言葉を交わし、関係を深める－

《この人どこかで会ったことがあるような気がするけど自信がない。誰だかわからない、名前が出てこない。こんな経験は誰にでもあるでしょう。実は、人の顔を記憶する、顔を見て正しく人を識別するというのは、簡単なように見えて、ものすごく多くの情報を統合しながら行う、高度な認知能力なのです。三次元情報の認知機能や記憶の認知機能、時間感覚の認知機能のいずれかの認知障害により、顔の識別ができなくなるのです。》

◆ 顔無し族の村の背景（大切な人の顔がわからない理由）

1. 三次元の情報を認識ことが困難になるため

現実に見る顔には、目のくぼみや鼻の膨らみといった起伏があります。つまり、向きや陰影によって見え方が変わる「三次元」の情報です。それを認知することは、アニメや写真を見ることよりも高度な行為というわけです。

2. 記憶の誤動作のため

私たちは、他者を見分けるためには、単純な見た目ではなくその人に関連する様々な記憶情報を使って、その人の存在を認識しています。その情報の記憶が一部でも誤っているとしたら・・・。

3. 時間感覚のトラブル

自分自身が若い頃にタイムスリップしたら、目の前にいる人は自分の知っている人とは思えない。

*人間にとって、顔とは信頼できる他者を見極め、深い関係を築くために大切です。

そのため、高度な認知機能の組み合わせで、他者の顔を認識しているのです。

◆ 人の顔がわからないトラブルの推理

1. 女性の顔に見覚えがなく、見知らぬ人に見えたのでは？ ⇒ 顔認識のトラブル

見るたびに「顔が変わって見える」「違う人の顔に見える」という事が起こります。⇒ 病院のような普段と異なる場所の場合、不特定多数の人が出入りするため、家族など馴染みがある人を正しく認識できないトラブルが起きがちです。

2. 自分の妻はもっと若いはずだとおもってのでは？ ⇒ 時間感覚のトラブル

自分が30代なのだから、自分の妻は20～30代のはずなので、目の前にいる70代の女性が自分の妻であると思えなかった可能性があります。

*家族の名前や顔がわからなくなっても、多くの場合、過去から長期間にわたり様々な形で蓄積された家族に関する記憶が全てなくなってしまうわけではありません。「認知症だから」と一括りにせず、ご本人と丁寧に対話し、理由を推理し、解決策を検討しましょう。

◆ アイデア

1. 「毎回名乗ってから、会話を始めるようにする」

「顔写真やイラスト付きの名札を付ける」

⇒会うたびに、最初に自分が何者かをはっきり名乗ることにしましょう。

⇒自分の名前や顔写真、イラスト付きの名札を身に着けることも一つの方法です。

2. 「家族・友人との思い出のアルバムを渡して、眺めることを促す」

「よく見える場所に、本人がお気に入りの家族写真を飾る」

⇒アルバムやお気に入りの写真を一緒に眺めたり、時間があるときに見ることを促すことで、幸せな記憶を維持できるでしょう。

眺めているうちに、顔と名前が一致することもあるでしょう。

3. 本人の話をよく聞き、ゆっくり会話を続ける

⇒相手の話に合わせて、ゆっくり会話を続けていると、最初はうちは誰だかわからなくても、あなたの声や全体の雰囲気、話している内容などから、誰なのかわかるようになることがあります。

《注意すること》

1. 忘れられて大変悲しいと感情に訴えかけること

2. 「私は誰？」と日常に問いかけ、顔と名前の記憶の維持を働きかけること

*これらは、本人の悲しい思いや、精神的な落ち込みの原因になりかねないので注意が必要です。